

## 2022年夏季福音特別集会 第1回 信・望一如

2022年8月27日 (京都KKRくに荘)

奥田昌道

今回の特別集会の目的 聖意体现の悲願・靈願に生きる 十字架と聖靈 ペテロ前書1章3〜9節 ヘブル書11章1節 主さま、ありがとうございます 何を食い何を飲まんと…… 望むところを確信し見ぬ物を真実とする 見えない根っここの世界 祈り

### ● 今回の特別集会の目的

皆さん、どうも、よく来てくださいました。それではただ今から第1回の集会を始めたいと思います。今年はいろんな事情で、形としても変則的なことになっておりますが、我々はその形がどうであれ、とにかく中味で勝負しよう、という気持ちであります。そして、どういふつもりでこの集会に臨んでいるか、ということに関しましては、今日皆さんにお配りしたプリントをご覧くださいと思います。これは昨日、作成いたしました。

「2022年夏季特別集会(京都)のために」

そこに「1 今回の特別集会の目的」は何か、それがハッキリしてないとピンボケになりますので、三つあげました。まず一番目、

① 各召団、各人が、御言葉・御霊を土台とした独立独歩の信仰の歩みが出来る

ようにとの願いを込めて、御言葉を学び、祈りを深める。」

我々は素人召団なんです。小池先生は、非常に宗教的な面で専門家としてのいろいろな研鑽を積んでこられたから特別ですけども、私は本来、法律学の研究・教育者であったわけです。そして、大学を退職してからも、裁判官の仕事をして、それが終わったらまた同志社大学で法科大学院の教育に携わったということですから、キリスト教あるいは聖書に関しては全くずぶの素人なんです。

しかし、ずぶの素人が50年間やってきた。ちょうど、今年は51年目にさしかかっています。1972年から独立の集会を始めました。妻と二人でスタートしたのが1972年なんです。それから数えるともう50年。51年目にさしかかっています。どうしてそんなことが可能であるかと言ったら、それはもっぱらキリストのバックアップ、キリストの導き、具体的には聖霊による導き、ということがなければ、そういうことは不可能なことであります。とにかく、50年間やってこれたということは、これ自体が奇蹟でなくて何でしょうか。そんなことを思うわけです。そういうことも込めて、

《各召団、各人が、御言葉・御霊を土台とした独立独歩の信仰の歩みが出来るように》



と、これが私の願いなんです。大きな組織をもった教会だったら、そこに所属しておれば、自分もまた子供たちも、次に続いていく世代も、その組織に所属することによって、いわば霊的に養われていくという保証があると思う。ところが、我々は一代限りということになりかねない。

小池先生が召されなされて、そのあと先生の志に共鳴した者たちがなお集会を続けているわけです。京都では私がリーダーとなつてやってきました。先生は半ばキリスト教の専門家ですけれども、私は法律学の研究・教育に携わってきた人間ですから、いうならば皆さんと変わらない。そういうずぶの素人がこうやって50年間集会を続けてこれた。信仰に導かれてからはもう66年になりますが、そういう集会を始め、伝道というものに志して既に50年経過したということは、これは全く御霊のキリストさま、生けるキリストさま、霊なるキリストさま、その方の護りと導きなくしては在り得ないことだと思ふ。皆さんは一人お一人がそういう自覚をもつて、大きな組織に属するのではない、そうではなくて、キリスト直結です。小池先生がよく

「キリスト直結で行こう。一人一召団、そういう心構えでやってほしい」と、そういうことを仰つておりました。

イエスが弟子としてお招きになつたのは、みな漁師でした。イエスの方から声をかけられた。そうすると、網を捨て、親父を捨てて、弟子として従つて行つたということが福音書に書かれています。これが大事なんです。キリストの方から声をかけて、捕まえてくださった。その御声に聞き従つた。ヨハネ伝の中で、

「<sup>16</sup>汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選び。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、……汝らを立てたり。」(ヨハネ15・16)

と、仰つています。そう言つて声をかけてもらった使徒たちは、宗教的には素人ですよ。パウロという方があと出てきて、これは特別な方ですけども。パウロを除いては最初のキリストの弟子たちはみな——当時の宗教家たちから見たら、全く問題外——そういう人たちがキリストの呼びかけにに応じて、3年間、イエス・キリストと生活を共にしていたけれども、彼らはイエスが十字架にかかれる時に、みな逃げてしまったと書いてあります。あのゲッセマネの祈りの時にも、

「私と一緒に祈つてほしい」と言われたが、みな眠りこけていた。そんな弟子です。ペテロにいたっては、

「イエスを知らない」

と三度否みました。そういう頼りない者たちですけども、復活されたキリストに出会い、そして50日目のペンテコステの時に、聖霊がくだつてきて、それから彼らは目覚めたわけです。使徒行伝にあるあのペテロの宣教なんかを見ますと、素晴らしいですよ。そういう全くの素人みたいな方々が、あの使徒の時代のキリスト教団の、キリストの弟子たちの



祈りの群、信仰の群の柱となつていった。しかも、彼らはみな殉教していきました。つまり、命懸けだったんです。

そういうことを思いますと、我々も本気で、そのように命懸けでとつくんでいるか。それが問われているはずです。キリストは福音書の中でも言っておられます。

「誰でも私に従ってきたと思うならば、日々己を棄て、己が十字架を負いて我に従え。己が生命を救わんと思う者はこれを失い、わがため福音のためにその生命を棄てる者は、永遠の生命を得る」

と、そんなことを仰っています。また、ヨハネはあの手紙の中で、

「キリストは私たちのために生命を棄ててくださった。これによって私たちは愛ということを知った。私たちも友のために生命を棄てるべきである」

と、そういうことを言っています。要するに、イエスの弟子たちは、最初は全く宗教的には素人の弟子です。それから、あのイエスが十字架におかかりになる時でも、キリストを棄てて、どこかへ散り散りに行ってしまふような、そういう頼りない方々でした。にもかかわらず、彼らは聖霊を受けたら、それからの彼らはガラリと変わって、本当のキリストの証人<sup>あかしびと</sup>、キリストを伝える器として活躍しました。二千年前のそういう事柄と、私たちの間に何も隔てはないんですよ。

「聖霊汝らの上に臨む時、汝らは力を受けん。而して世界の果てまでわが証人とならん」

ということを、あの使徒行伝の最初のところでキリストは仰っています。

要するに、私が申したいことは、組織とか学問とかそんなのではなくて、一人ひとりがキリスト直結、そして御霊のまにまにしっかりと捕らえていただいて、主の証人<sup>あかしびと</sup>、主の僕<sup>しもべ</sup>として貫いていくこと。これが大事だということを今日は皆さんに先ず申し上げたいんです。

それがこの①に書きましたように、「独立独歩の信仰の歩み」、それも「御言葉・御霊を土台とする」ということです。

《御言葉・御霊を土台とした独立独歩の信仰の歩みが出来るようにとの願いを込めて、御言葉を学び、祈りを深める》  
と。これが特別集会の第一の目的である。

### ●聖意体现の悲願・靈願に生きる

それから第二番目に書きましたのは、

《② 大切なことは「聖意体现」の悲願・靈願に生きること、

この「聖意体现」という言葉は小池先生がお使いになった言葉。「悲願・靈願」というのも、先生がある講演会の講演のタイトルにお使いになつていたように思います。

即ち、「自分が主キリストに何を願ひ、何を求めるか」の前に、「主キリストは自



分に、そして召団に、何を願ひ、何を求めておられるか」を尋ね、祈り求めること。》

我々が主役ではない。我々が自分の思うように伝道をやるのではない。主は何を願っておられるのか。何を我々に求めておられるのか。常にそれを第一にしていく。それがちょうど我々が願っていることとピタッと一致していれば、非常にありがたいですよ。多分一致するんですけども、心構えとして、自分が表に出るのではなくて、キリストが我々に對して、各人に対して、そして召団に対して、何を願ひ、何を求めておられるか。そういう角度から祈り求め、また御言葉を学んでいく。これが第二番目に書いたことです。

それから、第三番目に書きましたのは、我々の信仰にやはり焦点——漠然と福音というのではない。一番核心は何なのか——それを小池先生は、「十字架・聖霊」という印にまとめられた。十字架の「十」を書いて、それを円、「○」でつつんで、その円の中には聖霊が充満しているわけです。

十字架の贖いで「旧い私」は死んでいるわけです。いわゆる肉なる私、自我の私。多くの宗教家は自我を克服しようとして、いろんな修行をやったわけです。ある方は悟りの境地に達したりとか、なされたでしょう。けれども、我々は、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

と。自分で自我を葬るのではない。十字架でキリストが私の自我を、エゴを全部引き受けて、十字架で砕かれてくださった。神の審判ですね。義の貫き——「神は義なり」というですよ——神のいわば義、正しき、その前には人間はとも立てない。

「義人なし一人だになし」

という。ところが、不義なる私、しかもその「不義」とかいうのは、

「あんな罪を犯した、こんな罪を犯した」

という、個々の人間の行為とか、思いとか、それを超えて、存在そのもの、自分という存在そのものが本来、神に逆らっている。こんなことを言うと、皆さんは辛くて居たたまれないと思われるかもしれませんが、でも、それは仕方ないですよ。生物体としての人間は、みな命は惜しい。危ないことがあったら逃げます。自分を守ります。そういう自分を守るという、自己保存本能がある。相手が神さままであっても、

「いやこつちが大事なんですよ。私を守ってくれる神さまなら信じてやってもいい。」

私を守ってくれない神さまなら、信じる必要はない」

と。これが大体の日本人の宗教観ではないでしょうか。

「あそこの神さまを拝んだら、こういう御利益がある。こつちの神さまを拝んだら、

こんな御利益がある」

と。例えば、学問の神さまは菅原道真すがわらのみちざね。お産の神さまはどこどこだとか。何か分業で、あちらこちらへ行く。しかもそれは自分自身の幸せ、自分の子孫だけの幸せ——それは悪いことはないですよ、悪いことはないのだけれども——それが第一になっている。



「自分を守ってくれるから、神をあがめる。感謝する。それでなかったら、そんな神さまは、用はないわ」

という、御利益信仰と申しますか、それがずっと日本に受け継がれてきた宗教、信仰ではなかったでしょうか。それに対してイエス・キリストが説かれたのは全く逆ですからね。

「私に従ってきたいと思うなら、日々己を棄て、己が十字架を負って我に従え。己が生命を救わんとする者はこれを使い、わがため福音のために己の生命を棄ててかかる者は永遠の生命を受ける」

と。やはりイエス・キリストが目標にされたのは「永遠の生命」でしょ。天界の天の次元です。我々が生きているのは肉の次元ですよ。肉体を宿として、今なら100歳と言われていまずけれども、昔は人生50年と言ったものです。50年にしろ100年にしろ、そういう肉体の生命をいただいている間は、出来るだけ幸せに過ごす。自分も家族も。そういうことのために宗教は存在する、神さまは存在する。いわば、神さまは人間の召使めしつかいみたいな、そういう位置づけだったんです、おおげさに言えば。

それに対して、キリストが示されたのは、

「先ず神の国と神の義を求めよ」

と。あの祈りでもそうでしょ、

「父なる神さまの御名みながあがめられますように」

と、そこから始まっていますもの。自分のことは出てきてない、始めからは。先ず神さまのこと、聖国みくにのこと。

「あなたの御名が尊ばれますように。聖国みくにが来ますように。御意みこころが天において成っているように、地にも行われますように」

と、先ず神さまのことをキリストは第一に祈られました。おそらくそういう祈りをした人がいかなかったんでしょね、それまで。しかも、イエスという方にはそれがごく自然なナチュラルな感じがする。福音書を見てたら、イエスの歩いてこられた姿またはお言葉、それに何も無理がない。皆さん、そう思われませんか。

私たちは、従来の日本人がいただいてきた宗教観とか、そういうものから解放されて、直接にキリストの御言みことば、キリストの生きざまにふれて、そしてキリストに導かれる。私は「キリスト」と言うときは、まず十字架にかかられて、我々の罪を贖あがなってくださった。その贖罪の大業を果たして、一旦は地獄まで落ちてくださった。それがあの復活の姿、栄光の姿で現れた。そして、40日の間、弟子たちにたびたび現れ、それから天に昇っていかれたキリストを思う。そして、昇って行かれる時に、

「あなた方は祈って待っていないぞい」

と言われて、10日間祈っていたら、あのペンテコステが来たわけです。そういう霊統の中に我々は導かれている。



## ● 十字架と聖霊

そのことがこの第3番目に書いたことです。

《③ 全3回の集会を通して、「福音の原点」即ち「十字架(贖罪、旧き私の死)、聖霊(贖罪・旧き私の死の後に賜った新生命(新しき我))を護り導き給うキリストの御霊」(略して「十字架と聖霊」)を信受・体受する。そのための祈りを深める。》  
この三つを特別集会の目的に私は決めました。

第1回集会のタイトルは、「信・望一如」としました。これは8月7日付けで、「夏季特別集会(京都)にご参加の皆さまへ」というプリントで私が書いたことです。

《今回の特別集会は一泊二日の短期間の集会ですが、それにもかかわらず十分な成果を達成するためには参加者の各自において十分な準備をしていただくことが欠かせません。今回の特別集会の各回の講筵主題は以下の通りといたします。》

と。3回の集会をあげました。第1回集会の主題は「信・望一如」。第2回の集会は「祈り」。第3回の集会は「愛(永遠の生命)」です。愛といえは、やはり永遠の生命ですね。一番ヨハネ伝によく描かれております。そこで、皆さまにお願いのようなことを書きました。

《そこでご参加いただく皆さまにおかれましては、各回の主題にふさわしい聖句や聖書の箇所を選び出す作業をしておいていただきたい。たとえば、「信・望一如」に関しては、ヘブル書11章1節、》

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」(ヘブル11:1) ということになりました。それから、「祈り」に関してはロマ書8章26節、

「我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みづから言い難き歎き」[呻き] をもて執り成し給う」(ロマ8:26)

というところ。それから第3回目の「愛」(永遠の生命)に関しては、

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり。すべて彼を信する者の亡びを免ずして、永遠の生命を得ん為なり」(ヨハネ3:16)

と、これを掲げました。全体を通しての見取り図のようなことを申し上げたわけです。

## ● ペテロ前書1章3〜9節

今回に関しては、第1回集会「信・望一如」。これは「夏季特別集会のために」という文書の中の、時計文字の2番目に、

《Ⅱ 第1回集会「信・望一如」この主題に最もふさわしい聖書の箇所は》

とあって、2か所あげました。まず1か所はペテロ前書1章3〜9節、これを今、皆さんとご一緒に見たいと思います。このペテロの手紙というのは、内容が凄いですね。

「イエス・キリストの使徒ペテロ、書をポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤに散りて宿れる者、<sup>2</sup>即ち父なる神の預じめ知り給うところ



に随したがいて御霊きよめの潔きよにより柔順なならんため、イエス・キリストの血ちの灑そそを受け  
 んために選ばれたる者に贈る。願わくは恩恵めぐみと平安と汝らに増あさんことを。<sup>3</sup>  
 讚ほむべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫あわれみに随したがい、  
 イエス・キリストの死人おとこの中より甦よみがえり給えることに由り、我らを新あらたに生れ  
 しめて生ける望のぞみを懐いだかせ、

ここに、「死人の中より甦えり」、復活よみがえりなさしめて、それによつて、「我らを新あらたに生れしめて」  
 という。私はさきほど「十字架と聖霊」というところで、

《贖罪・旧き我の死の後に賜つた新生命(新しき我)を護り導き給うキリストの御霊》  
 と書きました。だから、それがここに出ている。イエス・キリストがあのご復活をしてく  
 ださつたことによつて、

我あらたを新あらたに生れしめて生ける望のぞみを懐いだかせ、

空しい望みではない。生ける望みは必ず成就する、そういう望みだという気持ちでしようか。

4 汝らの為に天に蓄たくわえある、朽くちず、汚けがれず、萎しぼまざる嗣業しぎようを継つがしめ給えり。

我々もいずれ向むかうこの世界へ行きます。そうしたら、こつうこつうという世界なんですね。

5 汝らは終おわりのときに頭あたまれんとて備そなりたる救すくを得えんために、  
 つまり、現在はまだ実現していません。しかし必ず終末がやってくる。その時に新天新地  
 に迎むかえられ、そこで新しい生活が始まつていくという、そういう気持ちだと思つう。

信仰によりて神の力に護らるるなり。

神さまはみんなを護りたいんでしょね。でも、それを本当に受けとろうと、謙へりくだりの心を  
 もつて受けとろうとしない者には、神さまのところには届かないのではないのでしょうか。  
 だから、この「信仰によりて神の力に護られる」というのはとても大事なことだと思ついます。  
 いくら神さまの方で護つてやろうと思われても、それを受け入れる準備ができてなかつた  
 ら、空から振りになつてしまつたのではないでしょか。

6 この故に汝ら今しばしの程ほどさまさまの試煉こころみによりて憂うれえざるを得ずとも、  
 なお大おほくに喜よろこべり。

この言葉に注目してください。キリストを信じていたら、神さまを信じたら、いいことば  
 っかり、幸せばかりではないんです。むしろ逆かもしれない。パウロだつてそうです。  
 さまざまな苦難を通り越していきました。その辺が、日本の宗教は、神信心は大体、御利  
 益信仰だとさつきから申しました。それとは違ちがう。むしろ迫害を受けたり、いろんな苦難  
 に遭遇する。しかも、それを通り抜けて行つて、初めて天国に凱旋する。そんなことにな  
 つてます。だから、こつこつでも、

「今しばしの程ほどさまさまの試煉こころみによりて憂うれえざるを得ずとも、  
 にもかかわらず、

大おほくに喜よろこんでゐる」



と。普通なら、「憂えざるをえない」と、それで終わりなんです。ところが、ここには、「にもかかわらず、あなた方は大いに喜んでいいる」

と言う。私はいつか京都の日曜日の集会で、我々の信仰は「されど」という逆転の信仰なんだと言いました。

ペテロが一晚働いて全然お魚が採れなくてガツカリしていたら、イエスが

「沖へ漕ぎだして、網を下ろして漁れ」

と仰った。

「はい、漁は全然ダメでした。お魚取りのプロの私たちがダメだったのだから、およそお魚取りに関係のないイエスさま、あなたのお言葉に従うのは本当はおかしいが、しかし、お言葉ですからやってみます」

と言って、やったら、もの凄い大漁で、応援を頼んでも舟にお魚が一杯になったという、ルカ伝の5章にあります。あの「されど」なんです。どんなに苦難がこようと、どんな目に遭おうと、不如意なことがいくら積み重なっても、「されど」と言って、キリストに自分をあずけて祈って行くという、そういう姿。これが我々の信仰の姿だと私は受けとっています。

「信心していたらいいことばかり」

と、そんなことはあり得ないですよ、経験上は。でも、何が起ころうと、それを突き抜けて、神・キリスト一筋に生きていく。それが我々の信仰の姿ではないでしょうか。

コリント前書10章のところに——これは私の大好きな箇所なんですけれども——コリント前書の10章13節、

「<sup>13</sup>汝らが遭いし試煉は人の常ならぬはなし。」

クリスチャンといえども、いろんな試練にあう。それはみんな味わっている。信者であろうとなかろうと、みんな味わっている。いろんな試練にさらされている。

神は真実なれば、汝らを耐え忍ぶこと能わぬほどの試煉に遭わせ給わず。汝らが試煉を耐え忍ぶことを得んために、之と共に遁るべき道を備え給わん。」

（コリント前10・13）

試練はある。しかし必ずそれをくぐり抜ける、そういう道を用意してください。だから、いろんなことが襲ってきて、それでひるんではダメだよ。パウロは本当にいろんな苦難をくぐりぬけて、キリストを讃え、キリストを伝えて行きました。我々だっていいことばかりではない。いろんな試練があるでしょう。でも、「されど」と言って、御名を讃え、祈って行く。これが我々の姿ですよ。それが今のペテロ前書1章で言いますと、

6 この故に汝ら今しばしの程さまさまの試煉によりて憂えざるを得ずとも、なお大に喜べり。7 汝らの信仰の験は壞つる金の火にためざるよりも貴くして、



あなた方の信仰のそういったテストを受けている。あたかも金が精錬される過程でいろんなプロセスを通じて純金になっていく、それみたいなもので、いろんな試練を通してあなた方の信仰は本ものになっていく、ということをやっている。

イエス・キリストの現れ給うとき誉と光栄と尊貴とを得べきなり。

次が素晴らしい。

8 汝らイエスを見しことなけれど、之を愛し、今見ざれども、之を信じて、言いがたく、かつ光栄ある喜びをもって喜ぶ。9 これ信仰の極、すなわち靈魂の救を受くるに因る。」(ペテロ前1:1-9)

と。私たちもイエスという方を肉眼で見ているわけではありません。無理ですよ、二千年前のお方ですから。また、霊なるキリストの姿も私はまだ見ていない。サンダーシングなんかは、キリストとよく対話をしている。その時に本当に肉眼で見たのか、そこはわかりませんが、とにかく、私たちは二千年前のイエス・キリストのお姿を見たことはない。けれども、そのお方を愛し、今見てないけれども、そのお方を信じて、言葉で表せない光栄ある喜びをもって喜ぶ。

この「喜ぶ」ということが福音書でも、あるいはパウロの手紙なんかにも度々出てくる。

「喜べ、喜べ。汝らの報いは大なり」

と、山上の垂訓でもキリストは言っておられるし、たとえば、ピリピ書なんかでも、4章以下は、

「喜べ、喜べ」

と、そういうことが出てきます。パウロにしたってさまざまの苦難を通して、なお「喜べ、喜べ」と言われる。その根底にあるものは何かということですよ。

「あなた方はイエスを見たことはいなくても、そのお方を愛し、今見てないけれどもそのお方を信じて、言いがたく、言葉で表せないような、光栄ある喜びをもって喜んでいられる。そういう姿にあるということは即ちあなた方はもう靈魂が救われているからだ。あなた方はもう天国行きということが決まっている。だから、あなた方はそのように喜ぶことができる」

と、そういうふうな受け取りたいと思います。これが今のペテロ前書1章3-9節のところですよ。

### ●ヘブル書11章1節

それから、2番目にプリントであげましたのはヘブル書11章1節、

「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり。」(ヘブル11:1)

ここでいう「見ぬ物」とは一体何でしょうか。キリストによる救いという点から見たら、「イエスが十字架に架けられて贖罪の大業を果してくださった」



という事実。これは、現在の私たちには見えない過去の事実であります。しかし、これを「**真実**」<sup>まこと</sup>として信受・体受する。それがイエスの十字架の救いという観点から見ると、「見ぬ物を真実としている」ということになります。

また、「望むところを確信し」と、そういうことからしますと、これは一般的な我々の信仰生活において、

「まだ成就していない、しかし、将来必ず成就し、実現すると確信し、それを前提として生活する」

こと。皆さん、どうですか。一般には、見て、「ああ本当だった」と確かめて、初めて受け入れます。見てない事実は、「然り」<sup>しか</sup>として受けとつて、それを前提として生活するなんて危なくてしょうがない。全然それが成就するという保証はなにもないんですから。でも、クリスチャンはどうですか。御言<sup>みことば</sup>をいただくと、御言を「然り」と受けとつて、そしてそれを前提として生活していく。

イエスさまのお姿にも現れていますよ。あのラザロを甦らせた場面を思い出してください。ラザロは死んで墓に葬られて四日になっている。そのラザロを甦らせなされた時のキリストの祈りを見てください。ヨハネ伝11章に出てきます。

「ここに病める者あり、ラザロと云う、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。<sup>2</sup>此のマリヤは、主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。<sup>3</sup>姉妹ら人をイエスに遣して『主、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。<sup>4</sup>之を聞いてイエス言ひ給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』<sup>5</sup>イエスはマルタと、その姉妹と、ラザロとを愛し給えり。<sup>6</sup>ラザロの病みたるを聞きて、その居給いし処になお二日とどまり、<sup>7</sup>而してのち弟子たちに言ひ給う『われら復ユダヤに往くべし』<sup>8</sup>弟子たち言う『ラビ、この程もユダヤ人、なんじを石にて撃たんとせしに、復かしここに往き給うか』<sup>9</sup>イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに躓くことなし。<sup>10</sup>夜あるかば、光その人になき故に躓くなり』<sup>11</sup>かく言ひて復その後い給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さん為に往くなり』<sup>12</sup>弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒ゆべし』<sup>13</sup>イエスは彼が死にたることを言ひ給ひしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言ひ給うと思えるなり。<sup>14</sup>ここにイエス明白に言ひ給う『ラザロは死にたり。<sup>15</sup>我かしここに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとなり。されど我ら今その許に往くべし』<sup>16</sup>デドモと称うるトマス、他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

もうイエスの身に危険が迫っているということがここでもうかがわれますね。



17 きてイエス来り見給えば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。18 ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、19 数多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて来れり。20 マルタはイエス来給うと聞きて出で迎えたれど、マリヤはなお家に坐し居たり。21 マルタ、イエスに言う『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。22 されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給わん』23 イエス言ひ給う『なんじの兄弟は甦えるべし』24 マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦えるべきを知る』25 イエス言ひ給う『我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。26 凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』27 彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信す』28 かく言いて後、ゆきて竊にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。29 マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。30 イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。31 マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思ひて後に随えり。32 かくてマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』と言う。33 イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言ひ給う、34 『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』35 イエス涙をながし給う。36 ここにユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』37 その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』38 イエスマた心を傷めつつ墓にいたり給う。墓は洞にして石を置きて塞げり。39 イエス言ひ給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』40 イエス言ひ給う『われ汝に、もし信せば神の栄光を見んと言ひしにあらざるや』41 ここに人々石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給ひしを謝す。42 常にきき給うを我は知る。然るに斯く言ひは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信ぜしめんとてなり』

このイエスのお姿ですね、祈りのお姿。ラザロはもう墓に葬られて四日も経っている。しかし、これからイエスはこのラザロを甦らせようとなさっている。それもご自分の力ではなくて、祈りをもつて、父なる神さまの御力によって、甦らせようとなさっている。その父なる神さまに対するイエスというお方の信仰が凄いです。

「父よ、我にきき給ひしを感謝す」

と、祈る前からもうあなたは私の祈りを知ってくださっています、私の願いを御存知でい



らっしやいますと。そう言つて祈つて、

43 斯<sup>か</sup>く言いてのち、声高く『ラザロよ、出<sup>い</sup>で来<sup>きた</sup>れ』と呼<sup>よ</sup>わり給<sup>たま</sup>えば、44 死<sup>し</sup>に  
もの布にて足と手を巻かれたるまま出で来る、顔も手拭<sup>てぬぐい</sup>にて包まれたり。

イエス『これを解きて往かしめよ』と言<sup>い</sup>給<sup>たま</sup>う。(ヨハネ11・1〜44)

「ラザロよ、出てこい!」と仰つたら、ラザロは出てきた。これが

「信仰とは望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」

という、その姿だと私は受けとつた。イエスさまの望むところはラザロを甦らせること。これは神の御力で絶対にやつてくださる。そして、神の栄光を現してくださる。そういうふう<sup>ふう</sup>にイエスは信じて、しかも、それは必ずそうになると、望むところを確信している。それはまだ起こつていないこと、将来のことなんです。誰も保証してくれない。しかし、必ずそうになると。望むところを確信し、見ぬ物をまこととする。ラザロはまだ墓の中です。甦<sup>そ</sup>つていません。しかし、甦<sup>そ</sup>つて出てくるラザロを思い描いて、そして祈られた。だから、私は、イエスのこの時のお姿、これがあのへブル書にいう、

「信仰とは望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」

そのお手本ではないかと思う。しかも、言いたい。「望むところ」というのは自分勝手に望むのではない。

「お前はこれを望みとせよ。お前に私はこの望みを与える」

と、望みそのものが主さまから与えられるんです。主さまから与えられるから、それは「既に成りたり」ということ。

「祈りたることは既に成りたりとせよ」

そうキリストは仰つた。それと同じで、神・キリストの側から、

「お前はこれをお前の望みとせよ、私が必ず成就してみせるから」

と言つて語りかけてくださったら、

「はい、ありがとうございます!」

と言つて、信じて疑わない。それが我々の姿なんですよ。

普通の人は、事が起こつてしまつてから、

「ああ、よかった。やはり神さまは我々のことを顧みてくださった」

というふう<sup>ふう</sup>に、事が起こるまでは多分信じてないんです。ところが、信仰の姿は、ここに  
ありますように、何も起こつていない。しかし、

「父よ、我に聴き給うたことを感謝します。常に聴いてくださることを知つて

おりますから」

と。そうやつて祈られるお姿が、これが正に

「望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」

ということではないかと思うんです。



実は、私たちの一人びとりに対しても、キリストはいろんなところでそう仰っているのではないだろうか。たとえば、ヨハネ伝14章。

「『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。』(ヨハネ14・1)

と仰っています。あの言葉は、限定はないですよ、どんな時でも、

「心を騒がすな、神を信じ、我を信ぜよ」

と、こう語りかけてくださっているんです。キリストの言葉は全部、自分に語られているというふうな受けとつてください。たとえば、

「<sup>16</sup>それ神はその独子<sup>ひとりご</sup>を賜<sup>たま</sup>うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡

びずして、永遠の生命を得んためなり。」(ヨハネ3・16)

という有名な3章16節も、今言いましたような棒読みで読んだらダメで、

「神はその独子をあなたに賜ったほどに、あなたを愛してくださった。それはあなたがこのお方を信じて、永遠の生命を得るためである」

「はい、ありがとうございます！」

と、こういうように読んでほしいんですよ。一般論ではダメなんです。あなたに直<sup>じか</sup>に今、語っておられる。

「はい、主よ、ありがとうございます！」

と。そんなふうには、この福音書におけるキリストの言葉、あるいは使徒パウロの言葉、その言葉を自分にじかじかに語られている言葉として受けとつていく。

何もまだ成就していない。しかし、

「祈りたることは必ず聴かれたりとせよ」

と、キリストは仰った。

「望みたるところを確信し、見ぬ物を真実とせよ」

と、それが本当の信仰だと、ヘブル書には書いてある。そういうことを日常生活の中で実現して実証していつていただきたい。これが私の皆さんに対するお願いなんです。

クリスチャンの証しというのは、何もいわゆる、

「十字架・聖霊、何だかんだ」

と、説教することではありません。そうではなくて、生活そのものが本当に神・キリストの御力に護られて、どんな苦難があろうと、どんな不如意なことがあると、ビクともしない。キリストは仰った、

「<sup>33</sup>……なんじら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝

てり」(ヨハネ16・33)

と。あのヨハネ伝の最後の訣別遺訓<sup>けつべつ</sup>、弟子たちとのお別れの一番最後の言葉がそうなんです。皆さまが福音書を読む時も、使徒パウロ、ペテロ、ヨハネ、そういった手紙を読む時も全部、自分にじかじかに直接に語りかけられている、御霊が語りかけてくださっていると、そう



いう思いでしつかり受けとって、

「主さま、ありがとうございます。感謝いたします」

と。まだ実現もしていない。でも、「見ぬ物をまこととする」と、そういう姿で日々歩んでほしいんです。そういう姿を貫いてほしい。そうしたら、そういう姿に接した隣人たちや周りの人たちは、

「ああ、やつぱり神さまは凄いなあ、キリストさまは凄いなあ」

と、そんなふうに見てくれるかもしれない。なにもそれを期待していいわけではありません。我々はどこまでも、主さまと一対一です。主さまと一対一の——「取っ組み合い」というと変ですけども——取っ組み合いです。パウロが、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」と言いました。

「わが生くるはキリスト、死ぬるもまた益なり」

とまた言っています。そういうふうな——命題を信ずるのではないですよ、我々の信仰は——そうではなくて、「キリストわがうちに生きたもうなり」と。

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず。御霊のキリスト、復活のキリストわがうちに生きて生き給うなり。われ今、肉体にあつて生きるのは、わがために十字架にかかつて死んでくださったそのお方を信じて生きているのだ」

と、ガラテヤ書2章20節です。そういう大事なポイントとなる御言をからだ全体でしつかり受けとって、それをベースにした生活をしていく。それをお願いしたいんです。

私は皆さんに、

「立派な信仰者になれ」

とか、そんなことは思わない。ただ、御言をしつかり受けとってほしい。御言の中にキリストは生きていてくださる。そうでしょ。

キリストはヨハネ伝6章63節で、

「<sup>63</sup>活すものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、<sup>いのち</sup>霊なり。」(ヨハネ6・63)

「人を活かすものは霊であつて、肉は役立たない。私が語った言葉は霊であり、生命である」

と言っておられます。人を活かすものは霊であつて肉ではない。また、

「神は霊なれば、拝する者も<sup>まこと</sup>霊と真とをもつて拝すべきである」(ヨハネ4・24)

とも言っておられる。だから、この世の現象面、我々の生きているこの現象的な次元を突き抜けた天の次元、それを私は御霊の次元とか、霊の次元、神の次元と言いたい。そういう次元にまで我々は引き上げられて、そこで御言を聞き、そこで受けとつたものを實際生



活の中で貰っていく。そういう在り方をさせていただきたい。

●主さま、ありがとうございます

キリストはニコデモとの対話の中で、

「<sup>3</sup>…人あらたに生れずば、神の国を見ること能わず。

と仰いました。ニコデモはその経験がないものですから、

4…人はや若いぬれば、争<sup>い</sup>で生るる事を得んや、再び母の胎に入りて生るる  
ことを得んや。

と、とんでもないことを言っています。

5…人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能わず… 10…なん

じはイスラエルの師にして、猶<sup>な</sup>かかる事どもを知らぬか。」(ヨハネ3・3〜10)

こんな当たり前のことがわからないのかと、むしろイエスの方がびっくりされている、そういう問答があります。

いや、私たちだって同じなんです。普通の人間、お母さんから生まれ、そして成長してきて大人になり、そういう普通の人間にはわからない次元。それが霊の次元、神の次元だ  
と思う。だから、私たちは通常、生活している次元と、もう一つ高い天の次元と二つあって、  
普通の人はこの世の次元、生物体としての人間のいろいろな自然環境の中で一生懸命に生  
きている、そういう次元で終わってしまう。ところが、我々はそういう次元に身を置いて  
いながら、

「もう一つ高い霊の次元、生命の次元、永遠の生命と言われている、そういう次元  
に生きろ」

ということを教えてください。

「我は道なり、真理<sup>まこと</sup>なり、生命<sup>いのち</sup>なり」

と。そこへ行く道だと。

「我は道なり、真理なり、生命なり。我によらずば、誰にてもあの永遠界へ往  
くことはできない。しかし、私を通ればみな往けるよ」

と。これが「我は道なり、真理なり、生命なり」というあの御言です。だから、パウロが  
あの復活を言っているところで、

「44 血気の体にて播かれ、霊の体に甦<sup>よみがえ</sup>えらせられん。血気の体ある如く、また

霊の体あり。」(コリント前15・44)

「肉にて播<sup>ま</sup>かれ、霊によつて甦<sup>よみがえ</sup>る」

と、ああいうことを言っているでしょ、コリント前書15章で。

「<sup>46</sup> 霊のものは前<sup>まへ</sup>にあらず、反つて血気のもの前にありて霊のもの後にあり。」

(コリント前15・46)



「始めに肉なるものがあって、後から霊なるものが出てくる」という、そういうことは復活に関して言っているわけですけども。

我々は、なにも復活の次元ではない。もう今、現にこの現世の生活において霊の次元、天の次元をいただいているんですよ。それを与えようとしてキリストは来てくださったんです。そうでしょ。我々に

「難行苦行をしろ、こういう修行をしろ」

とは何も仰っていない。

「幼児おきなのようにただ信じなさい」

と。そうでしょ。

「はい、ありがとうございます」

と、それ以外に何も無い。だから、皆さん、キリストに従って行く道というのは、難しいと思わないでほしい。「ありがとうございます」と、これ以外に何がありますか。「ありがとうございます」という平伏しの心でおれば、向こうからいくらでも恵みが流れてくる。

皆さん、どうですか？ 日頃からいつも

「主さま、ありがとうございます」

という生活をなさっていますか？ 朝起きたら、「ありがとうございます」と。寝ている間に心臓が止まったら、もう朝目覚めることができなかつたでしょう。それが朝目覚めることができた。「ああ、ありがとうございます」と。寝ている間にそれが止まらないとは誰も保証してくれていませんよ。でも、目覚めることができた。寝てる間に大地震が起こって、上からいろんな物が落ちてきたら、それでもうこっちはお陀仏ですね。いやあの頃はいろんな危ない物が落ちますね。ドローンなんか落ちたり、飛行機が落ちたりとか、いろいろな物が落ちたり、危険がいっぱいです。

とにかく朝目覚めたら、「ありがとうございます」と。皆さん、御飯を食べたら、おいしいですよ。

「ありがとうございます。御飯がこんなにおいしいのが本当に有り難いことです」

と。皆さんの生活の中で「ありがとうございます」と、一日に何回言っておられますか？ いや本当にね、私はこの歳になったら、この世的な職業でいろんなことをするという場面がないんですよ。だから、主さまと一緒に生活するというのが私の日常生活ですから、そうすると、「ありがとうございます」というのがおの自ずと出てきてしまうんです。

いや、私、今はみじめですよ、足が少し悪いから、杖をつけて歩いたり。どこかに出かけるにしても普通の三倍くらいの時間がかかります。ゆっくりしか歩けないから。でも、90歳になってまだ自分の足で歩けるということはありがとうございますと。そうでしょ。誰かが言いました、

「失われたものを勘定するよりも、残っているものを勘定しなさい。あれも足りない



い、これも足りないと思うよりも、これが出来る、あれが出来る、とそっちのプラスの方をいつも考えなさい」

と言った人があります。私たちからすれば、

「すべては主が備えてくださっている」  
 ということです。

●何を食い何を飲まんと……

私はマタイ伝6章25節からところが信仰に導かれた時、本当にありがたかったんですよ。皆さん、マタイ伝6章25節以下と叫びましたら、ピーンとききますか？

「25……何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。26空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。27汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。28又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。29されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。30今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。31さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。32是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なを知り給うなり。33まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。」(マタイ6・25〜33)

と。あの

「まず神の国と神の義とを求めよ」

という、私はその「神の国と神の義」というのを「イエス・キリスト」と読み替える。「神の国と神の義」とは難しくわからない。けれども、

「まず私を求めなさい。私はあなたに必要なものを全部満たしてあげるから。私はあなたと一緒に生活して、あなたを祝福するから」

と、こういうふうにはキリストが言ってくださっているのではないのでしょうか。

いや第一、イエスほどのお方がなぜ十字架にかかられたのですか。イエスというお方は祈っておられたら、まばゆい姿になつて、そのまま天に昇っていくお方ですよ。あの福音書で山上の変貌が出てくる場面の直前に——三つの福音書とも共通だと思う——十字架のことを言っておられる。十字架につけられて殺される。そして、三日目に甦る。そういつたことを言っておられる。それから六日の後とか八日後に弟子たちと山に登られる。そこで祈っておられたら、そのお姿が変わつて、まばゆい姿になつて、そしてモーセとエリヤ



が現れたと、書いてあるでしょ。あのように、イエスというお方は祈っておられたら、そのまま輝いて、霊なるひとですから、そのまま天に昇って行って不思議でないお方です。ところが、そのお方があの無惨な残酷な十字架の死を味わわなければならなかった。このことだけでも大変なことですよ。

讃美歌の136番と138番にありますね、「主の十字架はわがためなり」と。これは涙なしに歌えない讃美歌ですよ。

讃美歌136番「血しおしたたる」

- |   |          |                            |
|---|----------|----------------------------|
| 1 | 血しおしたたる  | 主のみかしら、                    |
|   | とげにさされし  | 主のみかしら、                    |
|   | なやみとはじに  | やつれし主を、                    |
| 2 | われはかしこみ  | きみとおおぐ。                    |
|   | 主のくるしみは  | わがためなり、                    |
|   | われは死ぬべき  | つみびとなり、                    |
|   | かかるわが身に  | かわりましし、                    |
|   | 主のみこころは  | いとかしこし。                    |
| 3 | なつかしき主よ、 | はかり知れぬ                     |
|   | 十字架の愛に   | いかに応 <small>こた</small> えん。 |
|   | この身とたまを  | とこしえまで                     |
|   | わが主のものと  | なさせたまえ。                    |
| 4 | 主よ、主のもとに | かえる日まで、                    |
|   | 十字架のかげに  | 立たせたまえ。                    |
|   | み顔をあおぎ   | み手によらば、                    |
|   | いまわのいきも  | 安 <small>やす</small> けくあらん。 |
- 讃美歌138番「ああ主はたがため」
- |   |                            |         |
|---|----------------------------|---------|
| 1 | ああ主は誰 <small>た</small> がため | 世にくだりて、 |
|   | かくまでなやみを                   | うけたまえる。 |
| 2 | わがため十字架に                   | なやみたもう  |
|   | こよなきみめぐみ                   | はかりがたし。 |
| 3 | とがなき神の子                    | とがを負えば、 |
|   | てる日もかくれて                   | やみとなりぬ。 |
| 4 | 十字架のみもとに                   | こころせまり、 |
|   | なみだにむせびて                   | ただひれふす。 |
| 5 | なみだもめぐみに                   | むくいがたし、 |
|   | この身をささぐる                   | ほかはあらず。 |



この136番と138番は私の告白と、そう言いたい。本当に「主の十字架はわがためなり」ということを歌っている。

●望むところを確信し見ぬ物を真実とする

プリントに戻りますと、

《へブル書11章1節「それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を真実とするなり」である。ここにいう「見ぬ物」とは、キリストによる救いという点からは、「主イエスが十字架に架けられて贖罪の大業を果してくださった」という事実。これは、現在の我々には見えない過去の事実である。しかし、これを「真実として信受・体受する」ことである。また、「望むところを確信し、見ぬ物を真実とする」とは、「まだ成就していない、しかし、将来必ず成就し、実現するものと確信し、それを前提として生活する」ことである。》

「まだ成就していない云々」というところは、コロサイ書3章を見ていただきましたように。

「汝等もし〔汝ら既に〕キリストと共に甦えられしならば〔甦えられしゆえに〕、上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。<sup>2</sup>汝ら上にあるものを念い、地に在るものを念うな、<sup>3</sup>汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。」(コロサイ3・1〜3)

ここに、「死にたる者にして」とある。これがさつきから言っている、

「われ主と共に十字架せられたり、もはやわれ生くるにあらず」

とパウロが言っていることです。十字架で私という「旧い私」はもう葬り去られている。死につ放しではない。新しい生命をくださったっている。それがあのガラテヤ書2章20節、

「<sup>20</sup>我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト〔御霊のキリストが〕我が内に在りて生くるなり。」(ガラテヤ2・20)

の御言です。コロサイ書では、

「<sup>3</sup>汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

と。肉眼には見えない。隠されている。

<sup>4</sup>我らの生命なるキリストの現れ給うとき、

これはキリストの再臨を指していると思いますが。

汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」(コロサイ3・3〜4)

あの復活のキリストの栄光の姿と同じような姿に我々も化せられてゆく。こういう大きな望みが約束されています。これが「見ぬ物を真実としている」姿ではないでしょうか。我々はそのように現に見ていない。けれども、必ずそうなること。

「我らの生命なるキリストの現れ給うとき、之とともに栄光のうちに現れてく



る

これが神さまの側から私たちに約束されている、将来に起こる出来事です。まだ見てませんが、見えぬ物を真実として、「ありがとうございます」と。

だから、クリスチャンがショボンとしていたら、本来おかしいんですよ。この御言は、周りから「これでもか、これでもか」というぐらいに、我々を「ヨイシヨ、ヨイシヨ」してくれているんですよ。それを、

「ありがとうございます。どうぞ、御言が成りますように」

と。あのマリヤさんの祈りがそうでした。マリヤに天使ガブリエルが語りかけられた、

「あなたは男の子を産みますよ」

と。マリヤはわからない。結婚もしていませんね。ところが、「男の子を産む」と言う。

「我は主の婢女なり。どうぞ御言のように成りますように」

と、彼女は祈った。それから、エリザベツの山里に訪ねて行きました。バプテスマのヨハネがエリザベツのお腹の中にいた。そこへ訪ねて行って、「こんにちは」と言ったら、お腹の子供が躍ったという場面がありますね、ルカ伝に。ああいう世界です。

だから、このコロサイ書にしましても、本当に私たちの霊の本当の姿を書いてくれているんです。でも、それだけではない。

「だから、この世の生活はどうでもいい」

とか、そんなことは全然言っていない。

「だからこそ、しっかりとこの世を生きぬけよ。モデルを示せよ」

と、言ってくれていると思う。

今のコロサイ書3章のもうちよつと先を読みますと、9節、

「互に虚言をいうな、汝らは既に旧き人とその行為とを脱ぎて、10 新しき人を著たればなり。」

あなた方は、既に旧い人は十字架で死んだ。そして、新しい人を既にいただいた。

この新しき人は、これを造り給いしものの像に「キリストに」循い、いよいよ新になりて知識に至るなり。

この「知識」とは奥義というような意味だと思う。そういうところに行くんだと。そうなるよ、

11 かくてギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、あるいは夷狄、スクテヤ人・

奴隷・自主の別ある事なし、

ギリシヤ人であろうとユダヤ人であろうと、そんなことは全然問題にならない。そんな区別はないと。

それキリストは万の物なり、万のものの中にあり。

エペソ書4章では、



「神は万物を貫き、内在し、貫在し」

というようなことを言っています。ここ、コロサイ書3章でもそういうことを言っている。そして、現実生活で言っているのは、3章の12節から17節までです。我々は現実生活を大事にしないといけないんです。

「天国をいただいた。ああ、めでたい、めでたい。でもあとには目茶苦茶」と。そうではないんです。だから、

「あなた方はこのように生きなさい」

という、わたしたちの生きる道しるべをしてくれています。

12 この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。13 また互に忍びあい、若し人に責むべき事あらば互に恕せ、主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。14 凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。

いろいろな徳があるでしょう。それを全部統括しているものが愛だと。

15 キリストの平和をして汝らの心を掌どらしめよ、汝らの召されて一体となりたるは、これが為なり、汝ら感謝の心を懐け。16 キリストの言をして豊に汝らの衷に住ましめ、

これが大事です。御言。我々から御言をはずしたらいけない。「キリストの言」は生命なんです。御言と御霊、これは大事です。だからここに、

キリストの言をして豊に汝らの衷に住ましめ、凡ての知恵によりて、詩と讚美と霊の歌とをもて、互に教え、互に訓戒し、

よく祈り会の中で霊歌をうたう方がいらつしやる。そういうことを思います。

恩恵に感じて心のうちに神を讚美せよ。

心のうちで「ありがとうございます」と言つて讚美しなさいと。

17 また為す所の凡ての事あるいは言あるいは行為みな主イエスの名に頼りて為し、彼によりて父なる神に感謝せよ。」(コロサイ3・9〜17)

### ●見えない根つこの世界

私の過去を振りかえりますと、学者的な生活を職業にしてきました。そのときに学者として生きること、研究・教育に携わること。そのことと、キリストを信じて神の道を歩むこと。この二つがどういふふうな関係に立つのか。それがわからなくて非常に悩んだことがあります。

そのときに小池先生は樹木の話をしてくださいました。樹木というのは、普通はみな上に伸びているのを見て、凄いなあと思う。しかし、20メートル伸びている樹木は必ず地下の方にそれに近いぐらいの根を張っているはずなんです。横に広がっているならば、根っこも



広がっているはずですが。それは目に見えない。しかし、目に見えないその根っこが、上の樹の成長を早め、それを支えている。小池先生が言われたのは、

「見えない根っここの世界が宗教の世界だ。つまり地球の中心に向かって進んでいく。文化の世界、我々の日常活動の世界、職業生活、それは見える世界。普通の人は見える世界だけを見ている。しかし、見える世界が本当の意味で素晴らしいくなるためには、見えない根っこが大事だよ」

ということを小池先生は教えてくださった。私は学問のことで悩んでいたときにそれを聞いて、

「ああ、そうなんだ。本当の学者であるためには、本当にキリストという、そういう地中深く、そのキリストの懐へと根を張っていく。そして、そこから養分を吸い上げて、この学問もまた健全に展開するんだ」

と。これは学問にかかわらず、皆さんの職業においても、家庭生活においても、みな言えることではないでしょうか。

「見える世界、地上での見える我々の日常生活が健全であるためには、見えない祈りの世界、根っここの世界が大事だよ」

という思いです。

ですから、どうぞ、皆さん、地味で結構です。キリスト道というのは、いわゆるキリストの御意、

「あなたの御意がどうぞこの身において成りますように」

と祈る。自分のことをまず第一に願わない、祈らない。

「あなたが私についてどのような御思いでいらつしやるか。どう在ることを願っておられるか。それをどうぞ教えてください」

と。しかも、その「私」というのは十字架で贖われた私なんです。旧い私ではないんです。新しい生命をいただいた私が、

「本当にキリストの証人として、神のお使いとして、この世で生きていく上で必要なものをごぞ、お示しください、お与えください」

と祈る。そんなことではないでしょうか。

皆さんはそれぞれの生活はみな違います。違うけれども、共通しているのは、そこに御霊のキリストがいつも生き生きと生きて働いてくださっているか。主さまに担われ、導かれ、護られ、そして生き生きと御言・御霊・祈りの生活を貫いているか。そのことではないでしょうか。そして、人間関係でキリストが一番望まれるのは愛ですよ。愛に関しては第3回の集会で取り上げますけれども。あのコリント前書13章に、

「4 愛は寛容にして慈悲あり。」

という有名なところがあります。



愛は妬<sup>ねた</sup>まず、愛は誇<sup>おご</sup>らず、<sup>5</sup>非礼を行わず、己の利を求めず、憤<sup>いきどお</sup>らず、人の悪を念<sup>おも</sup>わず」(コリント前13・4〜5)

と、ああいうふうなこと。しかも、キリストは御自分の生命を棄てて、愛ということを示してください。そういうことですので、私たちは派手なことは何も要りません。要りませんけれども、

「わが生くるはキリスト。われ主の中に、主はわが中に」

という——小池先生が提唱してくださいました——そういう主と共に歩む祈りの日々を送る。御言を糧としてくらつていく。そういう地味であっても、本当に生命が、御霊の生命が貫いているような、光輝く生き方、そういうことをキリストは願っていてくださると思います。そして、我々はあるの「主の祈り」を祈ってほしいんです。

「主よ、御名<sup>みな</sup>があがめられますように。御意<sup>みこころ</sup>の天に成るようにこの地にも、この身を通して、成らしめてください。日毎<sup>ひごと</sup>の糧<sup>かて</sup>を今日もお与えください。」

と、ああいう単純なシンプルな祈りです。

太陽は上から私たちを照らして生かしてくれます。空気は私たちを包んでおります。寝ても覚めても空気は我々の体内をめぐって、我々を命づけてくれています。ヤコブ書に、

「すべて善きものは、光の父、天の父から下ってくる」

というふうに書かれています。だから、

「今しばし、いろいろなことで苦しいことがあっても、忍耐しなさい」

ということをやコブ書は言っています。

まあ、聖書の話はここまでにしますけれども、どうぞ、皆さん、少なくとも新約聖書を——「少なくとも」と言いますのは、旧約聖書は膨大で大変ですよ——だから、旧約聖書では、イザヤ書の40章以下とか、ある程度限定して。それから、詩篇は素晴らしい。イザヤ書40章以下と詩篇、それくらいに限定して読む。それから、新約聖書は——黙示録はちよつとなかなか大変ですけども、黙示録は一応除いて——その他の福音書、それから使徒たちの手紙、使徒行伝などに精通してほしい。みなどこを開いても、そこから御霊が躍動しているような、生命が溢れているような、そういう御言と共なる生活、主と共に生きる生活、これをどうぞ、これから皆さん、歩んでいただきたい、貫いていただきたい。そういうふうに願います。それでは、第1回の集会はこれで終わりいたします。

## ● 祈り

短く祈ります。

主さま、万難を排してここにお集まりくださったお一人お一人を、どうぞ、主さま、あなたが祝福し抱きあげ、御言・御霊をもって生かしてくださいますようお願いいたします。世界情勢を見ましても、実に混沌たる姿であります。いろんな論調を見ましても、誰ひとり、



神・キリストを指し示すものは見当たりません。しかしながら、私たちは常にあなたが我々と共にいてくださる。

「主は我々のために生命を捨ててください、これによりて愛ということを知りたり」

とありますように。また、

「神はその独子<sup>ひとりご</sup>を我らに賜<sup>たま</sup>うほどに我々を愛してくださいました。御子<sup>みこ</sup>キリストを信受する者は一人も亡びないで永遠の生命を得るためである。」

と。既に永遠の生命をいただいています。主さま、ありがとうございます。

どうぞ、今日そして明日の短い間の集会ですけれども、その各集会を御霊・御言で貫き、包み、祝福してくださいるようにお願いいたします。

この短き讚美と感謝、祈りを兄弟姉妹たちのそれと共に、尊き主イエス・キリストの御名を通して御前にお捧げいたします。アーメン。

